

革新者が幻想入り

小熊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東方Project×劇場版機動戦士ガンダム00



真のイノベーター、刹那・F・セイエイ。

彼とその他の人々による死力を尽くした対話の果てに、人類は地球外生命体との共存へと至った。しばしの平穏を得ることができたが、

しかし、それでも争いの火種は拡散し続けている。

争いの元を根絶するために刹那は向かう……が。

※独自解釈が含まれます。

※キャラの性格が違うのかもしれないので

それが駄目な方は読まないことをおすすめします。

※更新は不定期です。

3 2 1

--	--	--

18 11 1

目次

1

西暦2314年。それは地球に訪れた。

地球外金属生命体、Extraterrestrial Living metal

Shapeshifter、通称ELS。

ELSは次々と地球上にあるもの、人間、MSなどを取り込んでいく。

地球を侵略しに来たのか、と思われるがそうではない。

彼らは自分達の住んでいる星が滅亡寸前であったために地球に助けを求めに来た。

地球外からの生命体である彼らの意思伝達の手段は融合することによってやくやく伝わる。

しかし人類は地球を侵略しに来たのかと考えた。

地球外生物との対話、為せるのは一人の男。

刹那・F・セイエイ、人類初のイノベーター、彼はすべての希望となった。

秘密武装組織ソレスタルビーイングのガンダムマイスターである彼は対話の為のM

S「ダブルオークアンタ」に搭乗した。

彼は純粋種の「イノベーター」、作られた人間「イノベイド」とは違う、人類の進化した先の存在。

ELSは人のもつ会話だけでは伝えることが出来ない相手だった。

イノバイターの力の一部である脳量子波を用いり、他者と表層意識を共有することによりELSとの対話が可能だということが分かった。

ダブルオークアンタの対話のための武装クアンタムバースト。

クアンタにだけ備えられたELSとの対話するための唯一の手段。

「お前たちの目的はなんだ！ 答えろ！」

ELS達は移住先の生命体に助けを求めていた。

自分たちの星は滅びの道を進んでいた。

どうか助けてくれないかと。

犠牲、協力、悲しみの末、人類はELSと対話を成功させた。

自分達はすれ違っていた、ただ勘違いしていた。

それから50年もの月日が流れ、人類は大きく変革していった。

ELSという地球外生物との共存。

人類の過半数は宇宙進出を考える者が増えていった。

クアンタムバーストによるGN粒子散布。

これにより全体の約4割の人類が、純粹種のイノバイターと変革することができた。

意見のくい違いによる衝突、喧嘩、争い。

全てが無くなるように思われたが現実はそう甘くはない。

イノベーターの力を悪用し戦争の道具として扱う、犯罪道具として扱う、争いの火種となるものが、歪みとなるものがそれでも存在した。

このことを黙って放置しておくわけにはいかない。

対話のためのMS、ダブルオークアンタ。

そのパイロットである刹那・F・セイエイ。

MSに乗り、世界中の有りとあらゆる争いごとを根絶する。

人類が平和であり続けるために行動をしてきた。

青と緑でトリコロールされた機体、ダブルオークアンタ。

その巨軀から翠色の粒子を放出しつつ駆けぬけていく。

▽

星々が連なる宇宙、そこに俺達はいる。

視界には蒼く輝く星が入る。

GN粒子濃度調整。

装備不備問題なし。

システムオールグリーン。

今日も介入する準備はできた。

「刹那、ヴェーダから通信が入った。

今日はモラリアあたりで紛争が起きているようだ。

止めにいくぞ。」

クアンタのコンピュータの一部の電子端末と化したイノベイド、テイエリア・アー
デ。

いつも通りの変わらないはつきりとした声で語りかけてくる。

長年付き従っていくうちに仲良くなった。

それはお互いを理解したからとも言える。

モラリア、か……まだ紛争は続いている。

何年経つてもいい。

自分達の目的は地球から争いごとを確実に無くす。

そのために俺達はいる。

出来るのならば”対話”で解決。

出来ないのならば……”武力”。

「……ああ、紛争を根絶する」

イノベーターとして進化した者達。

力の使い方を誤ってはならない。

正しい使い方をしてほしい。

外宇宙の生物との対話のための役割の他に、平和へと導くための役割。

それが、イノベーターとなった者達のもう一つの力の使い方だ。

機体の肩部分に付いているシールド。

それに付属する翠色のビット兵器を展開。数は六つ。形は刃のように鋭利。

機体の前に六つのビットが間隔を開け円形に並べられる。

コックピット内のパネルを操作し、量子ワープの準備は出来た。

これですぐに介入は可能だ。

「……………ん？ な、なんだこれは……………!?!」

突然ティエリアが困惑したような声を発する。

普段冷静な奴からは予想も出来ないような動揺っぷりだ。ただごとではない。

「どうした、ティエリア!」

「くっ!なんだこれは!」

刹那! すぐここから逃げるんだ!

今、ここに向かってく 何が! MS じ な なに か

「ティエリアが説明を終える前に、何かはすでに、俺達を取り込んでいた。」

機体を無理にでも動かそうとしたが、その黒い何かの拘束力は異常だ。

ダブルオークアンタのパワーでも抜け出せずコントロールが一切効かない。

コクピットから見えるカメラには真っ暗になった視界。

ティエリアは応答しない。

「っ……何が!?　ぐっ……!」

後頭部に硬いもので殴られた。

余りの威力に脳が揺らされ意識が保てなくなる。

(どうなって……い……る……)

認識できていたのはここまでだった。

▽

真っ暗だった筈の視界に突然光が射し込んで来た。

今いる場所はいつものコックピット内ではない。
宇宙空間でもない。

「はい、はい、はい。」

自然を感じる。安らぎを感じる。

草木が揺られ音をたてる。

背中腰から草の匂い。

どこかの森林……か？

クアンタはテイエリアは。

そもそもだ、あの黒いのはなんだったのか？

MSのパワーでも剥がすことのできなかつた何か。

意識が無くなっていたときにどういう経路でここに来たのか。

(……いや、それよりもだ)

脳量子波を探るためにイノベーターの力を使い、頭のなか鮮明になっていくのを感じる。しかし、テイエリアの反応はない。

気配を感じられない。あるのは微かに聞こえる動物の鳴き声、意思。

このまま何時までも寝ているという訳にはいかない。

取り敢えず体を起こし立ち上がる。

体の節々が痛い障害にはならない、問題ない。

まずはクアンタだ。あれがなければ話にならない。

恐らく近くにあるのはずだ、むしろそうであってほしい。そう願いながら探す。

草木を掻き分け歩く道を作り出す。

時折体に付いてくる虫を落としながら暫く歩いた。

「うおー！ なんだろうこれ!？」

声が聞こえてくる。

無邪気にはしゃいでそうな声。

声の高さから、子供か？

「大きな……えーと、にん、ぎょう？ まあ、何がなんだかわからないけど持ち帰ろう！

遊び道具になる！ 絶対!」

「持ち帰るのは流石に無理のような……」

まあでも、こんな大きな人形見たことないね……」

大きな人形と言う言葉が聞こえてきた、まさか。

声のした方へと走って向かう。

「んー、どうにかして持ち帰る方法、”さいきよー!”のあたいたら何か天才的な方法がピ

ンッ!と」

「……チルノちゃんは確かに”さいきよー”かもしれないけど、これぐらいのサイズ持ち帰るのは諦めたほうがいいような……」

「そういわれるのは嫌だ！ 諦めるものかあ！」

そこには緑色の髪、青色の髪をした少女達。

そして、彼女達が言っている大きな人形。

ダブルオークアンタがそこに佇んでいた。

「……ダブルオークアンタ、無事だったか」

安堵する。

一安心したところで視線をMSから少女たちに移す。

どこにでもいるような子供達と思った、が違った。

背中に羽と思わしき部分。

緑の髪の少女は昆虫の羽根、とは厳密には違うが、羽を生やしている。

青い髪の少女は氷のような結晶が六つ、背中から少し離れた位置に浮いている。

あれも羽だろうか。

以前の場所ではどこに行っても見かけられなかった幻想的な存在がそこにはいた。

少しの驚いている、が考えている暇はない。

人の言葉を話しているから大丈夫だ、恐らく。

「……その子供達、すまないが」

2

幻想郷に春が訪れた。

小鳥達の囀り、風に揺られる木々。

冬の間冬眠していた生物たちは活発になる。

幻想郷に住む、人間、妖怪、妖精、神。

一部を覗いた住人が春の訪れを喜ぶ。

しかし、そんな中見るからに不満な雰囲気を持つ少女がいる。

場所は博霊神社と呼ばれる幻想郷のほぼ中心に位置する神社。

神社と呼ばれるからには参拝客は少しぐらいいるだろうと思うところ。しかし、神社の立地条件上、普通の人間はほとんど来ることができない。たまに来ることはあるがそれはある程度妖怪退治に心得がある者、普通じゃない力を持った者がほとんどだ。

「ふう」

神社の境内の掃除を終え一段落。

箒を手を持つ博霊神社の巫女、博霊霊夢は一息ついた。多少面倒だとは思いつつも境内がきれいになるのを彼女は割りと気に入っていたりする。

いつも通り空な賽銭箱の隣移動し箒を置いた。

その場に座り込み曇り一つもない真つ昼間の青空を見上げる。

「……はあ」

ため息。

気分はあまりよろしくない。とにかくスッキリしたいところだが、どうにもできない。
い。

博霊霊夢は今現在、憂鬱だ。

その主な原因は知り合いの魔女っ娘、霧雨魔理沙が原因だ。（ある店の店主は友達以上なんて言っていた）

ここ最近、霊夢は彼女に弾幕ごっこで負け続けているということ。

そもそも弾幕ごっことは何か。

簡単に言えば、みんな同じ土俵で戦う決闘方法というもの。

幻想郷は妖怪、人間、神……様々の種族がある程度平等に住む理想郷とも言うべき場所。

その中でどうしても埋められない差があつた。

それは種族ごとによる基本身体能力の違い。

根本的なものから、何もかも違う。

その差を埋めるためにどうしたらいいか、なら対等に戦えるルールを作ってしまったという発想のもと現在の博霊神社の巫女、博霊霊夢は弾幕ごっこを制定した。



「……ほんと、なんでかしら」

自分が魔理沙に負け続けている。

前までなら6：4ぐらいの割合で勝っていたが、ここ最近では3：7ぐらいの割合までになった。

おかしい、おかしいぞ。

博霊霊夢と霧雨魔理沙はなぜ弾幕ごっこをするのかそれは日々の日課。暇だからやろうぜ感覚でやっているもの。

……最も互いが持つストレスを解消するのが本来の目的だが。

「……」

……ここ最近負けている理由を考えてみる。

持ち前の勘、反射神経で魔理沙の弾幕を避ける。

それは問題ない。ぶつちやけ幻想郷の誰にも負ける気がしない。

魔理沙の弾幕はいつもと変わらないすごいカラフル。何も問題ない。

自分の武器である針の投合技術も問題ない。

何十、何百メートルもの位置にある物体に命中させることもできる。

体に不備なんて無い。

手、足、首……何不自由なく動かせる。

ただどうしても気になること。

「あいつ、あんなに機敏だったっけ……？」

ここ最近の魔理沙の身体能力がおかしい。

色々すごい。近接格闘能力が明らかに高くなってる。

私と同レベル……もしくはそれ以上。

そして”先読み”能力、まるでこつちの動く先が”見えている”かのように動く。

そして私の”思考を読んでいる”かのように避ける。

数日前のあいつならありえないと言っても言い話だ。

そもそも本人は格闘技能は苦手だと言ってたし、身体能力自体はそこまで高くなかつ

た筈。

基本「弹幕はパワーだぜ」主義なあいつ。

とにかく力でごり押し。

先読み能力や近距離での機敏さ、なんてない。しかし

”最近のあいつ”にはそれができている。

「何かあったのかしら……」

数日前から突然強くなった知り合いのことが悔しさとはまた別に心配になる霊夢だった。



「……そういうことです」

未知との邂逅。

ELLSでその経験はしているがそれでも驚いた。

まさか、本当に、ファンタジーものの本などに出てくる妖精がいるとは思わなかった。

青色の服装の少女——チルノが最初は説明していたが少々わかりづらい。そこで察してくれたのか、緑色の服装をした少女——大妖精は説明を至極丁寧にしてくれ

た。

ここがどんなところなのか、自分達は人間ではなく妖精だ、という内容。

それを聞いた上での質問したいこと、それは

「ガンダム、MS（モビルスーツ）、ソレスタルビーイング……知っているか？」

「えーと……ごめんなさい、わかりません」

「それすたるびーいんぐってなんかおいしそう！」

大妖精は困ったような顔をした。

脳量子波越しに伝わってきた言葉は”申し訳ないです”……本当になにも知らない

みたいだ。

しかし、ソレスタルビーイングのどこが美味しそうなんだろうか。

「そうか……ありがとう」

一言お礼を言い、視線をダブルオークアンタに向ける。

緑、碧を中心としたカラーリング。

太陽から降り注ぐ光を受けその身体は輝く。

傷はあると思つたが見たところ全くない、整備された後のとほぼ同じ状態が、膝立ち

してそこに佇ずむ。

正直信じられないことが起きている。

現代——西暦2364年だというなら、軍のMSが飛び交っていても可笑しくない、国のほとんどが発展している。

なのにここはどうだ。MSの飛び交う様子は見られない、とにかく自然に囲まれている。動物達の鳴き声なども聞こえてくる。

そして自分達は妖精だという、人間みたいに見える生物。背中に羽を生やし中に浮かんでいる、空想上の生物。

困惑するしかない。

#3

日が沈み空は暗くなった。

曇りの全くない空には星々が浮かぶ。

とある森の奥深くに佇む一軒家。

まわりは木、草で覆われあまり人を寄せ付けない外観となっている。

窓と思わしき場所から微かな光が漏れている。

そこにはいかにも魔女な姿をした少女がいた。

黒い服。金髪。そして顔を全部覆うほどの大きな帽子。

彼女が椅子に座りながら読む本は”魔法力の上げ方く地獄編く”。

その本は分厚く普通の女子が読むには少し辛いぐらいの重さ。

読書用の机に本を、隣にメモ用の手帳が置いてある。

普通の魔法使い、霧雨魔理沙は今日も魔法の研究に時間を費やしていた。

▽

紅魔館から借りてきた本を読む。

勿論返すつもりはある、自分が一人前になる頃、いつになるか分からないが返すつも

りだ。

借りる時毎回と言っているいいほどパチュリィは文句を言ってくる。

正直、すまないと思っっている。反省は勿論している。謝罪文もちやんと送っている。許してよお。

そもそも私がずっと借りたいと思わせる本がたくさんあることがいけないことなんだ。

本を読むことは好きだ。

魔法の次に私の人生の生きがいといってもいい。そこから得られる知識は私の脳に確りと刻まれていく。

ただ、自分は人間、魔法使いではあるけど人間なのだ。やっぱ眠気、疲れには勝てない。

本の続きはまた明日にする。

キノコの絵が描かれたしおりを本に挟み、閉じた。背筋と腕をよく伸ばす。

本読んだ後のこれは実にいいもんだ。

机のランプの火を消し、窓から見える空を眺める。

「ん〜……」

曇りの一切無いきれいな空。

星ってなんであんなに輝くんだろうなといつも疑問に思う。

とりあえずそろそろ寝るか。早く寝巻に着替えて……あ、そうだ。明日は霊夢の所にも行くか。この前の弾幕ごっこのリベンジしたいしな。

「……ん？」

窓からのぞいた先、地面から少し離れた位置に淡々と輝く緑色の光、緑色の塊がそこに浮いていた。

魔法使いの性分、気になるものには近づきたくなる。

すぐさま椅子から起き上がり、すぐ近くの扉のドアノブへと手を掛ける。

そのまま光り輝くもとへと向かった。

緑色に光る粒子はただただそこに浮いていた、虫でも何でもない何か。蚩かなにかかとは思ったが違う。その粒子から、何か引き寄せられる力を感じる。

物凄く気になる手を伸ばし触れようとした瞬間、緑色の粒子は消えてしまった。

あれっ疑問に思ったと同時に突如、頭の中に酷い痛みと共に自分の知らない光景が浮かんできた。

「っ！な、なんだ?!……うわあっ！」

襲ってくるのは激しい痛み。思わず頭を押さえた。

頭の中で見えてくる光景はなんとも不思議なものだ。

《乱れ撃つぜええ!!》

《反射と思考の融合だあ!行くぜえ!!》

《これは、人類が生きるためのっ!!》

《エースを、舐めんなあ!》

人型の巨大な、人形……?に乗ったよくわからない服を着た人達が叫んでいた。

中には泣いている人、怒っている人、笑っている人……様々な人達が見えた。

ただ彼らに共通している点として何かに対して一生懸命になっているということ。

中には人形ごと鉄の塊に突っ込んで爆発している人なんていた。

間違いなく、死んだのだろう。命がなくなっていくこの光景に気分が悪くなる。

青い星に向かっていている鉄と思わしき何かに向かって、銃と思われるものから光弾が放たれ、また近づいてきた鉄の塊に向かって手に持った大剣で叩き切るなんてことをしている。

鉄の塊が向かう先は青くてでかくて綺麗な星。

彼らは鉄の塊からこの星を守ろうとしているのか。

《お前たちの目的はなんだ!答えろおお!!》

次に映し出される光景は青と緑でカラーリングされた人型。そしてその搭乗者。

鉄の塊を生み出していると思わしき星の中で、私が見た緑色の粒子を放出している。

場面が切り替わった。

さっきの青い星には一輪の巨大な花が咲いていた。

そして聞こえてくる誰かの声。

《俺たちはわかり合うことができた……》

《争いの切っ掛けはほんの小さなすれ違いから生まれたものでしかない》

どうやらさっきの鉄の塊、E L Sは青い星、”地球”と呼ばれる場所に資源を取る許可を貰いに来ただけらしい。

人間へと接触をとって見たが、交流の仕方がわからない彼らは結果的に人を殺してしまっただと。

それが切っ掛けで戦争へと勃発、E L Sはそれが地球の挨拶方法だと勘違いして攻撃。壮大なすれ違いによるものだった。

さっきの二人はイノベイドとイノベーターと呼ばれる存在で、彼らだけの能力である量子子を扱うことで異種間での交流に成功した。

見せるものはここで終わりのようだ。

周りを見渡せば私の家。そして暗い森、虫の鳴き声、星々が浮かぶ空。

まるで何事もなかったかのようにいつも見慣れている森の景色へと戻った。

なんというか、うん、すごい。

結構、いや、というかかなり壮大じゃないか。

そもそもあれほどの時期のものだ？見たこともないし幻想郷の異変でもあのようなことはなかった。ほんとなんなんだ？

人が死ぬシーン見せられた時はうわってなったけど。

考えてみるが、どうしてあの緑の粒子に触れただけでこんな光景が見えたのだろうか。私はなぜ見せられたのか。

先程の光の粒子の研究をしようにしても、消えてしまった。何にもわからない。

「はあ、頭痛いなあ……まあ、うん。取り敢えず寝よう、そうしよう」

寝ようとしたときにあんな光景見せられるとは思ひもしなかった。魔理沙はともかくつらいと感じていた。短時間で一気に知識を詰め込まれて脳の疲労を嫌でも感じさせられた。頭を押さえながら彼女は家へと引き返していった。

▽

太陽の光が窓から差し込み、部屋全体を照らし出す。

霧雨魔理沙は今日も普通に起きる。

上半身だけ起こし背伸び、腕も伸ばしておく。

体を解すことで血の巡りを良くすることで眠気がだんだんなくなることを感じた。

「うしー」

自分の体温で暖まった布団のぬくもりを名残惜しく思いながらもベッドから降りる。

昨晚のようなよくわからない事態が起きたが、一晚寝ればスッキリして頭痛もなくなつて気分がいい朝を迎えられた。

しかし……あの光について色々調べたかった。あのあまりにもなすんごい光景を取り敢えず洗面所へ、近くの川から汲んできた水を使い顔をよく洗い、うがいをする。鏡をふと見る。

特に変わりもしない、幼さの残る顔がうつる。

しかし、気付いた。

「あれ……目が……？」

そこに写っている自分の瞳の色に違和感を覚えた。

まるで吸い込まれるかのように、引き込まれてしまうような瞳を確認できた。

「金……色……ええ!?これ、昨晚の……ええ!」

▽

チルノ達と取り敢えずまた会おうと約束してから別れた刹那は引き続き探索を行った。

青と緑を強調した巨大な機械人形は空を飛ぶ。緑色の粒子は空気中へと静かに消えて自然と一体化していく。

雲より少し下の位置へと飛び上がったクアンタ。そのコックピットから刹那は幻想郷を見下ろした。

広がるのは森、遠くに見えるのはいつぞや偵察に行つた日本で見たことがある神社らしきもの、目が痛くなつてくる程に真赤な館とその手前に広がる湖、雲よりもさらに高い山の上には建物らしきものが確認できた。

しかし、深く調べようとするとカメラにノイズが入り表示がまともじゃなくため何かしら嫌な予感を感じた刹那は調べることをやめた。

ふとその中で先程確認できたどの建造物よりも、近い位置に多くの人の気配を感じられる村が見られたためまず手始めに刹那はそこに向かうことにした。しかし、先程会つた彼女達はMSという存在に対して警戒など色々な感情で見ているため迂闊にMSの姿を現すのはよくないと判断した。

よつて人里付近の森に誰にも見つけられない位置にクアンタを隠すことにした。

クアンタに迷彩処理を施した後、人里にたどり着いた刹那は取り敢えず情報が欲しいため聞き込みを開始することにした。妖精から教えてもらった情報だけある程度把握はできているがもう少し欲しかった。

人里の入り口に人間が見えた。取り敢えず話を聞きたいがために尋ねることにした。

「その、すまない」

「ん？なん……おや、このへんじゃ見なれない格好してるな？旅の方かい？」

「信じられられないかもしれないが、いつの間にかここにきていたんだ」

「いつの間にか？あんたそりや……いや、ふむ、ちよつと待つてくれるか？」

「ああ」

村人はそう言う人と人里の奥へと走っていった。

刹那は気にはなるが取り敢えず言われた通りにすることにした。